



「保命酒(ほうめいしゅ)」は広島県福山市の景勝地、鞆(とも)の浦特産の酒だ。入江豊三郎本店(同市)は1886年(明治19年)の創業で、現地に4軒残る保命酒の蔵元の一つ。入江里彩(48)は2019年、母親の跡を継いで7代目の社長に就いた。新型コロナウイルスの逆境の中、130年にわたる伝統を必死で守ろうとしている。

21年11月、念願だった本店の改装オープンを実現させた。物置だった建物の奥も使って店舗を広げ、保命酒のほか、レモンリキュールなども提供する。ベンチを置いた休憩用の庭を設け、無料のWiFiも整備しておしゃれな店に生まれ変わった。

保命酒は本みりんを原酒

鞆の浦で脈々 保命酒守る

蔵元継ぐ気なし一転やみつき

入江豊三郎本店 社長
入江 里彩さん



として、高麗人蔘(にんじ)とていた。入江は東京の音楽人、菊花、桂皮(けいひ)などの16種類の薬草をつけ込んだ甘い酒だ。江戸期に生まれ、福山藩の御用酒となり、黒船で来たペリーも味わったという。

明治期には複数の蔵元が醸造を始めたが、現在残るのは4軒。入江豊三郎本店は原酒となるみりんの製造から手作業で行っている。

「もともと会社を継ぐつもりはまったくなかった」という。一人娘ではあったが、両親は自分の代で終わらせてもかまわないと考え

土下座をして謝ったことも何度もある」という。

社員をひっぱっていくのには役だったのがトイレ掃除だ。朝誰よりも早く来て掃除することで、率先して働く姿勢を見せた。さすがしく、心が整うという。

働くうちに自分の適性にも気付いた。訪れる観光店の接客や、新商品の企画などが楽しかったのだ。「自分にはこんな側面があるんだ、と思い仕事をやみつきになってしまった」。20年余り、会社のあらゆる業務に携わってきた。

造は身近なものだった。2階が自宅だったため「朝にはピンを洗う機械の音で目が覚めた。米を炊いたときには湯気が部屋まで上がった」という。ただ、仕事として携わるのはまた別の話。故郷に戻ってから「社員に

社長の継いだタイミングは良くなかった。新型コロナウイルスの感染拡大で鞆の浦への観光客は激減した。現在は「まん延防止等重点措置」で休業中だ。社員も減らし、広島県府中町の支店も閉めるなどの事業縮小も余儀なくされた。

ただ入江は鞆の浦の底力を信じている。「すごく気持ちのいい場所、コロナ後、復活するのはわかってる」。次に会社をどう伸ばしていくのか、日々考え続けている。

敬称略
(長沼俊洋)